

# 城西考古の歩み

第2部 草創期 1967

第2期生 著

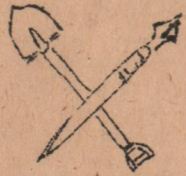


城西大学考古学研究会

# 城西考古の歩み

第2部 草創期 1967

第2期生 著



城西大学考古学研究会

城西の古き歩み

第2部 草創期 1967

第2期生 著



城西大学考古学研究会

第二部 草創期

まえがき

第一部の草創期に続いて、私たち第二期生が  
新らしき村の発掘を中心にして一年間を回顧して見た。  
これは単なる回想録ではなく、これを讀んだ後輩  
諸君が我々がいかに悩み、苦しみ、そして戦いぬい  
て今日の考古学研究会を築きあげたかを良く理  
解し、少くともこれからの活動における心の支えになら  
ば誠にこの本の主旨になるものであり我々として  
も感激の至りに耐えないのである。

目次

第二部 草創期

第一話	新入生部員募集	1
第二話	新入生歓迎会	4
第三話	発振の予防接種	6
第四話	新らしき村遺跡発振第三次調査	7
(1)	発振前日	8
(2)	発振開始（兼入式）	10
	○ 死の苦しみほどの雷雨到来	13
(3)	日々記録	14

第五話

日々の記録

○ 球夜大会

○ 樽祭前日

第六話

樽祭

○ 中川さん爆発する

第七話

日々の記録

第八話

第三回発掘展示会

第一章 新入生部員募集

昭和四十二年四月十一日の昼過ぎ、私は坂戸の駅でタバコをくむながら立ち上った。その日は、四月にしては珍らしくと天気があつた。

坂戸の公民館ではさぞかし盛大な入学式を行はれていることだろうと、そんなことを考えていると、越生行ききの電車が、入ってきた。故郷から持って来た荷物が、肩に重くのしかかってくる。座席の中で一息つくると、此れからの生活の不安や期待が、小々の長旅で疲れたせいのか頭の中を、巡る。しかし私も二年生。此れからは、新入生から「先輩」「先輩」と、言われ出る身分だと、まだ見ぬ新入生への不安が、よ

っぱり頭を採めた。そんなことを言っている内に電車は、川角駅に着いた。四月十四日、今日は、新入生募集の日だ。久振に研究室に来てみると、清水、高橋、西先輩や、それ以外に、高田、酒井君もいた。暫くといっても、二ヶ月位だが、見ないうちに皆んな、私より大人になった気がする。十一時頃、経済学部の前を、置いて募集を始め

た所、他の部は大分部員が、集ったのにならぬのは、誰も見向きもしない。その内、皆あせって来たが、どうにもならない。その時私は、二三人の女性のグループが、食堂から出て来たのを、見つけた。せめて女子部員だけでも確保しようと思つて、その内の一人へ

「お、あの……考古学研究会の者ですが、我がクラブに入りませんか。彼女は、「ハッとして私の顔を見つめた。その目は、あきらかに、私に対し警戒心を、現わしていた

ので、言い方が、不味(まず)かったなと思ひ、氣まづくなって顔を、横にそのした脇間

、彼女の、美声が、私の顔にかかつてきた。  
「私、興味ありませんわ、それにごめんなさい。失礼しますし。その一言に私は、ガッカリ

してもう次の言葉が、出なかつた。そしている内に、彼せは、他の女性達と一緒に経済

学部の構内へ、消えて行つた。これが、私と、北村さんとの、出合であつた。

後で判つたことだが一緒にいた人にせかされて、仕方なく言つた……という二とが、判

つたので、私の心も、少しは慰められる氣がした。結局、その日は、新入部員は、一人

も入らなかつたのである。

四月三十日の午後、五時頃私と酒井君は、クラブが終つてから、経済学部の階段を、二北

からの部の方針などを、話し合ひながら降りていった所、一階のロビーの所で例の北村さ

んと、他四し五人の、女性グループが、卓球をして遊んでいた。その内、北村さんが、我

々の方を、見たので挨拶がゆりに、「どうです。我が、クラブへ入る決心が着きましたか

?」と聞いた所、彼女は、まだ決心が、つきかおていない様子だつたので、丁度良い機会だ

から皆で、部室を見学に来るようにと、観めたい、彼女達は、羨望に付いて来た。

その間、酒井君は、頻りに彼せ達に、出身地を、聞いていた。その内の一人が、北海道

出身だと、言つたので、振り返つた所、それはまだ、高校時代のあどけなさを、顔に残した

南 寿子さんであつた。その日は、私と酒井君の大奮闘で、南 北村 慶屋 猪俣

さんらどんどんとか四人が、入部した。大成功である。

五月十日、その日は、朝から良い天気だつたので久振に二階の先生の部屋で私と、高田

、酒井君らが、三人で、土器洗ひをしていた時、長山先輩が、女性を四人連れて入つてき

た。四人とも、あまりにも「美人?」なので皆、呆氣にとられて、「ホカカン」としていた

所、その中の目のクリツとした可愛い娘が、「私、田淵俊江です。先輩。よろしくお願

いします。」と、ハキハキした声で私の方をその大きな目でギツと見つめた。私は、今ま

で女性から、先輩なんと言われたいとはなかつたので、その大きな目で、ジツと見つめら

れては、いかに自信過剰の私といえども、動揺せずにはいらぬなかつた。頭の中は、カ

ツとなつて、心臓が、ドキドキし、眼から火花が出そうなきがした。そうしてある内に、

他の三人がそれぞれ、「松保明子」、「井沢幸子」、「津部久子」と、名乗つて、それ

の方に氣を、向けると「田淵さんに負けおあらずの可愛い娘ちゃんだったので、内心こ

や夏の合宿が、楽しみだぞと、思つていると、もう酒井君が、井沢さんにアブロー4して

いる。何くそ、負けてたまるか、と、猛然と、ファイトが、叫びてきた。

第二話 新入生歓迎会

五月二十日、クラブ員全員、東毛呂駅へ集合（鎌北湖へハイキング）朝方は少し曇ってはいたが昼頃には、まずまずの上天気になった。皆楽しそうな顔をしていたが私は、昨晚の徹夜マージャンの疲れが残っていてかなり良い気分ではないが、それでも少しでも楽しい顔をしようと思つてしきりにタバコを、吸いながら気分転換を計っていたが、その内に誰かがボートに乗ろうといい出したので私もハッスルマ、しきりに合乗りをさがしてみたが誰も私と一緒に乗ろうとしない人が、仕方がないので一人で乗ろうとしたら庭屋さんが申し出たので喜んで一緒に乗ったのが運のつきであった。といつのは彼女は、小がらではあるが見るからに健康そのもので少しグラマー過剰であった。いざボートに乗って漕ぎ出してから十数分もたたない内にボード

の底から水が、にじみ出て来てついに、底に十センチメートル位たまってしまった。おかしいとは思っていたが、その時は別に大したことはないと思つてしばらく漕いでいたがだんだん沈みかかってくる。すぐボートを岸に着けて降りたが彼女は別に何ともなかったのに私（中川）はしまったと思つた、時にはすでに遅く靴からズボンの裾にかけて水浸しになってしまった。他の部員は、ボートに乗っている人、茶店で何かを食べている人、散歩している人など楽しく遊んでいる。

四時頃、主将の中川氏のあいさつで自由解散となった。

### 第三話 発掘の予防接種

七月九日(金) 部会の日ではあるが今日は発掘のための、予防接種を、川角駅から越生寄りに二つめの東毛呂駅から行くと目的地毛呂病院である。

午後四時限目の講義が、終り次第に川角駅へ集合し考古学部々員全員(といっても男子四名、女子十二名)に、やかたにこれから打られるであろう注射のこと等、考えることもなく毛呂病院へ到着いざ看護婦さんに一人一人呼ばれ診察室へ入る、顔は何んともいいようのない渋い苦い顔をして自分が終つてしまつと他の人を見に行つては「痛いぞ!」「痛いぞ!」と驚かしている。ようやく全員が

ようやく全員終つて病院を去る時にはもうケロリ「バチンユして行くこうせ」とか「何か食べていこう」等、家へ帰るのは何時位になるのであろうか、ともかく今日の予定である日本脳炎は終つたそうしてゐる間に夏の発掘は一日と近づいて来た。

### 第四話 新しき村遺跡発掘Ⅱ第三次調査

七月十七日、約二日間、城西大学の野球場裏から歩いて約二十分の場所である。宿舎は経済学部の校舎を便い食事は、学校の食堂に依頼した。

発掘参加者は次のとおりである

三年生 清水公一 青藤博一 長山一学 室田信一

二年生 中川俊一 高田邦彦 堀合公威 木谷晋一 遠藤禮子

高橋富美子

一年生 池内修一 原田純 藤原隆 北村道子 田淵俊江

南 容子 井沢幸子 松保明子 戸部久子 庭屋美代子

① 発掘前日

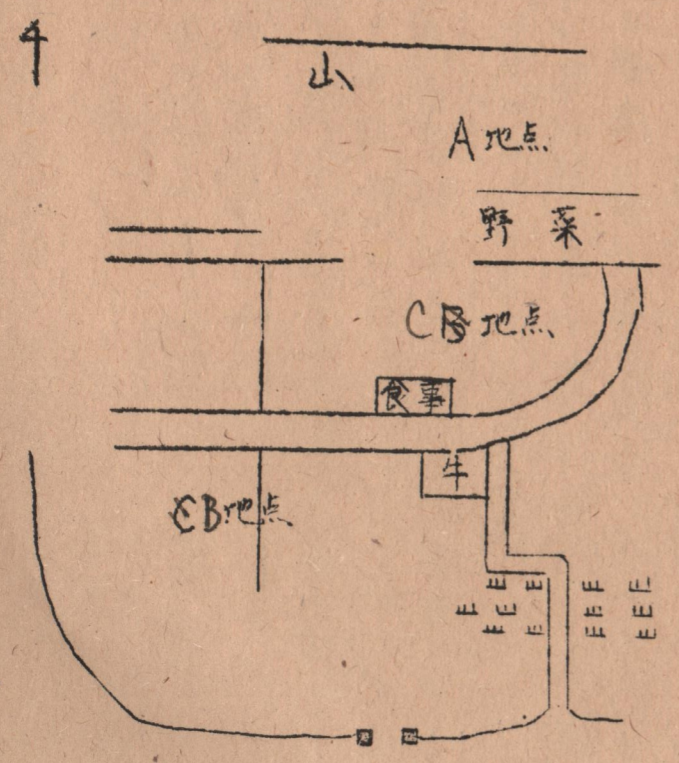
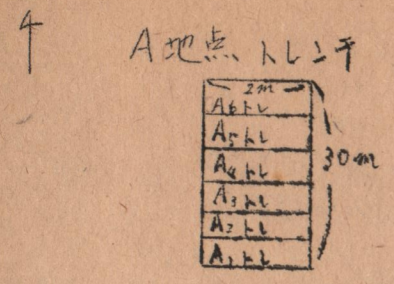
予防接種も終之、発掘に必要な器材もすべて取り揃えた。あとは、発掘を持つばかりという失先、学生部から寝耳に水というよ  
うな事を言われた。

「合宿場所や風呂の件について学生部に話かきたくないで教室・そ  
他の場所は貸せません」とこれを聞いて我々は大いにあわてて  
しまった。

「明日から合宿することを予定していたので発掘参加者がす  
でに集まってきているのですか」と言って三つの教室(601 602 603号室)  
と、風呂を明日から使用させる……ということでも話かまらなかった。

だが最初からこんなことになってイヤな気分になった。何も我々独自の  
発掘をする訳ではなく大学の五ヶ年計画の発掘をするのだから、  
それ相当の準備は我々が言わなくてもするのが普通であるう、も  
し気付かずにいたのならすぐに準備してくれるのが常識である。  
ところが聞いていなかったら、室を貸せないとは、何言かと言いたかった。

今日(十五日)いろいろと問題が生じたが十五人の参加者は、無事に、その  
日を過ぎた。



(2) 発掘開始 (鋳入式)

七月十七日

夏の陽が照りつける中で先生を格別として大学等の他の関係者  
として発掘参加者の見守る中で鋳入式が行なわれた。

これからいよいよ掘るのだと思うと我々の若いエネルギーの躍動とが、  
五体をよぎった。それは、これからの約二日間に行なわれる我々の根性と  
勇気と協力の和によって エンピを武器に土との戦いが開始される前の  
最っとも厳静な一瞬である 振り振り始めたのはこれが新開

十一時 いよいよ 戦開 開鑿地の木の根の多いところでも掘りにくい所で、  
あったまろで去年の富士見塚の発掘と同じ様である。この作業で新入  
生達は何からずも発掘の厳しさを痛感したようである。

A地点のたて2m横5mのトレンチに六本を振り上げた。そして主な出土物  
としては、茅山式土器片である。これで発掘が一日目の作業は、終  
えた。

七月十八日

新しき村の西方を、B地点としそこに2M、3Mのトレンチ  
六本が入れられた。昨日の疲れは、若さゆえ、何んともない  
と言いたいところだが……誰でもなれない仕事をすると翌  
日その疲れは残るものだ。ここで身体に鞭打って一時間も掘  
れば、疲れを感じなくなるから不思議である。

昼食は「おむすび」と「饅頭」そして野天で煙にまかれて、  
汗を流し、流し作った味噌汁である。食事時はどうしても  
「美女」の活躍が目立つものだ。甲斐甲斐しく働いてく  
れて味噌汁などを運ぶ女は後光がさして見えるものだ。

そう、そう「新しき村」での食事は、同村の食堂で用意し  
た「おかず」の他は新しき村の人々が差入れをしてくれぬ。漬物  
やさゆり、梅干し……などで、これらは我々にとってすこぶる  
受けが良かった。時には奪い合いも生じた。

しかし中には歓迎出来ない「おかず」もあった。それは埃りどにおいの「おかず」であつた。

申し遅れだが我々の食事を取る場所は、桜の木の下の陽影であるがその前には道がありその向うに牛舎がある。そのモト公（牛まます）ときたら我々の食前前で恥ずかしくもなくバナナやお茶を出すのである。そのお茶を出す時間の長いこと長いことそしてその量の多いこと。それはいいとしてそのお茶は床で躰返つて道に墜ちてくが能ひ出し夏の陽にダイヤモンドのごとく「キラッキラツ」と光り道にしみ込んでいた。その道を車がいりまると巻き上げて走りまるとたまらない。我々が口に運んでいける真白いおにぎりはゴマ塩のおにぎりに変わる。その為このおにぎりは塩味がきいておつな味であつた。けれどもモト公のバナナお茶、鶏の臭いには閉口させられた。しかしそれこそ最初だけで我々考古の人間はどんな悪条件でも克服する。

野生児の集団でありそんなものにはすぐになれなかつた。

### ○死の苦しみほどの雷雨到来

この年は雷雨が非常に多かつた。この雷雨は我々に死の苦しみの多きに味あわせてくれた。死の苦しみの説明の前にこの雷雨の説明をしよう。

雷雨と共に西の空に突然黒い雲が見えるやいなやその雨は我々の頭上をおおいかぶす。すると冷たい突風が吹き始めたり。これと重なって雨がぽつぽつとおらてくる。あつて我々は濡れは困る器材をバタバタといそいでかたづけしている間に「ガー」と物凄く雨となり「ゴロゴロゴロドカン」「キヤータステ」などと我々の「裸の大将」がめく我々の振つていたトレンチには見る見る内に水がたまり池のようになつて遂にあふれ出してしまつのである。しかし雨があがれば台地の為

すぐに水が引くので作業は続けられるのだが濡れた土の重さは骨身にひしひしとこびえたり、なかに肉身にこびえたり人も三人いた。エニピも三回ふるえばおつりが多くなつてしまひ、やりにくいこと、はなはだしい。

そして帰れば落雷による停電で、断水となり、風呂と半畳ばかりの密室(ウコをおとす所)で行う禅の杜快さを奪うばかりの死の苦しめを与えた。これはあまり長く我慢することは、身体のためによくないので、川から水を汲んできてすませたものである。(これはナニがつまづいているのでナニを流したのである。ナニ↓とは読者各自理解して下さい。)

### (3) 日々の記録

発掘も四日目になると、そろそろ畜積されていた疲労がいつぱんに出てくる時である。朝起きるのが非常に辛くなるのも道理というものである。とりわけ新入生は不慣れな性もあつて、

バテかたも激しいのだろう。

さすがに三藤原君は頑ばつたが、田淵、角、北村の三人は朝起きでこぼれ出て発掘現場へやつてきた。もっともこの三人の女子の他に庭屋さんもおたが発掘三日目で自動車部の合宿に行つてしまつた。大つていてよく笑つた家であつたが二つのクラブを兼ねたことを合宿が重なり自動車部の方を選んだことは、残念なことであつた。人それぞれその生き方があるのだから仕方がないが後になつて、二つのクラブを兼ねる事が問題になつてくるのである。

こゝで前記の三人であるが彼女達は正直に言つて発掘作業で働き過ぎである。三人それぞれ個性あつて明るく可愛い娘でまだ彼女自身の体力がどの程度ものかを知らなかつたものと思う。

従って夜は合宿の樂しさに酔いしむれ、昼は自分のすべてを發振にぶつけた。そして男に負けまいとする気持でエンピをふるって三日目についてダウンしてしまった。

しかし若さとは何と素晴らしいことか、半日の睡眠で、彼女たちの体力はほぼ回復した。

發振の日がたつに、従って体力をつけ、その後はぐだいたい無事に發振を乗り切ったのである。

ここではぐだいたいというところを、時と強調したい。南えは瘦せてはいないから、瘦不足はすぐ臉にあらわれる。もとより細目の人であるから、朝は、臉をけらして、目が開いていゝのか、いゝのか、わからない顔をして、朝の食事の用意をして、いる次々を見ると、なぜ『タヌキ』と仇名が付いたのか、わからなくなる。(忘乎ムジナ)

北村さんは三人組の中では一番体力のある人で感情を素

直に表現する娘である。

そして仕事には、自分の体事ぶつけて行く娘であった。

自分に対して忠実であり、この感情への忠実さがクラブを去る原因になったのではないのか？

田淵さんは、タヌキという南えんに対し『ギツネ』として並ぶ存在となったが、この時は寧ろ、フナ(フナネコ)という名称で通っていた、なんでもやってみよう的タイプで、目的に向って粘りのある行動を取るかと思えば、その反面、簡単にすんなりと飽きてしまったりもした。そして酒に強く、この夏は梅酒などを持ち込み疲労回復剤として愛用していた。

この三人組は、何事も男性には負けまいと維持を張り他のせろ部員とは少し異質な何かを持っていたようだ。女性達の明るくはつらつとした行動とは、対照的に新男

子部員は、あまり目立つことはなかつた。最も二対四で元々華やかさのある女性と比べるのが無理な上、池内君は、重労働はするこゝが出来ず、もう一人の男性である藤原君は非常に大人しく黙々と仕事をするだけであつた。為目立つことが少なかつたのではないか？。そして夜は一人でギターを引き初めての発振での不安、戸惑いが疲労と共に重なり、自分の中に閉こもつて一人考え込むようになり皆の中に溶け込むことはなく初めてのコンパの時、一人、橋の欄干に座り川を見ながら考え込んでしまひ、昨日に捜し廻らしたりした。池内君は、牙主頭でこの格好は海坊主に似ている事から入道などと仇名が付いた。至つて活弁家であり、詩を語り、書を読む事が好まない様で、昼間は、主に読書をして合宿の留守番をし、御客様などが来ると、新しき村まで案内をしていたが合宿半ばにして、家の事

情で帰つてしまつた。

二年生はと言つと、去年からの部員、中川、酒井、高田君らと遠藤、高橋さん、米谷君、そして新しく加つた堀合君の七人で、二、三の人が抜けたのは、非常に残念な事であつた。中川、酒井、高田君らは発振初日から参加し後の者は発振途中から参加したのである。中川君は主将であり去年に比べて逞しさを身に付け張切つていた。

しかし、北海道育ちには、夏のこの暑さは、堪えるらしく、水入りが多かつた。水と言へば、この新しき村の水は、非常に冷たく美味しかった。この水は牛に飲ませるための水で、冷凍室で牛の乳と一緒に冷やさ小ているものを我々が失敬してゐる次第であつた。そしてヤカニに汲んでくる水は、すべに足り、何度も何度も取りに行かなければならなかつた。噫かし、このような水を飲ん

でいる牛は満足し、たら腹水を飲み、水はい乳を沃火出す  
ことであろう。

発掘は楽しいが、少しの油断や注意を怠ると、き面に響いて  
来る。そしてCやEで問題が起ってしまった。普通、表土という  
ものはワンスコップ以上の「き」がありその下にオニ層若くはローム  
層が現われるものであるが、ここでは新しき村が崩壊した際にブ  
ルトーザーで均したらしく表土中にもローム層や黒土が混入してい  
る。そのこの担当者達は「エイヤーノ」とばかりワンスコップを入れしまった。  
するとそこは、ローム層であり遺物らしき物は余り見つからな  
い。さらに振り下げてしまった。そして何もないと報告した。新壁  
の清掃をするように言われ清掃を始める。と何と住居跡ら  
しさもので、ローム層が切り込まれている断面が現われ、いるのを先  
生が見つけられ「バカモン」の一喝が中川君の頭上に飛んだ。発  
掘経験が浅い我々にとっていたしかたなかった。事とはいえなく

は行いが、貴重な遺跡を不注意で破壊した事は二度と取り替いがつ  
かないのだと言われ、我々の行なっている発掘の重要性を改めて感じ  
させられた。

その住居址を他の場所より推定して後で復元を中川君が行な  
った。彼の精魂のために復元も、人の目は、誤魔化しても写真も、誤魔化すこと  
ができません。その場所がほつきり写っていた。

酒井君はB、C地点の縄文住居跡で深い穴を掘らされていた。  
その穴は掘っても掘っても底につかず、なかば頭にきながら二メートル  
ルちかくの穴を移植に長い木をくりつけていぬいに掘りあげた。  
ここは、なんら注目すべき所でないが、彼は、いやな仕事でも与えられた  
ものはやり通す根性を、我々に見せてくれた。

高田君は、少し後から参加したが、最初は、皆と同様、トレンチを掘った  
りしていたが、遺跡がその姿を少しづつ現われ始めると、突刺の刀に  
刺った。ここには、清水先輩(コウジ)の「ごき」が待っていて、突刺の基

本からいろいろ教えられ、又立句も言われながら良くその助手を勤めていた。

米谷君は、小さな体でどこから出てくるのかわからぬ力を根性で頑張った。

その内、遠藤・高橋・松保・戸部・井沢さんなどが前後して参加してきて、疲労コンパをしている。我々に一種の華やいた奮闘気を持ち込んできた。そしてそれが我々に新たな活力を与えた。最っとも発根後、ラグビーボールを跳ったり川で泳いだりするバカもいたことはいたが、そいつは(坂倉さん)後でオーバーヒートして外耳炎にかかって、ウーンウーン唸っていただけ。

では、ここで後から参加した松保・戸部・井沢さんの三人組について、ちよと触れておこう。この三人組は、先生の運転する(車)後座席に麦藁帽子をかぶり、チヨコンと座わって登場したので、先生が「どこの中学生さんですか」と言うと言うと三人組は「ちよと、脹れたが、その姿は、いかにもあどけなく可愛らしかった」

「私と戸部さんは二人で一人前なんです」といいながらも一生懸命仕事をしていた後の猪鹿蝶子・メガネさんをこの時から、予想することができなかった。一方井沢さんは、きりやな手にあせもや水脹れを作って頑張っていた。

その他に発根応援参加者として樽見・佐々木・斎藤・杉田などの諸氏と川越サ子高生があげられる。以上の人達は強い夏の日射しに汗を流しながら我々城西生に負けまいと頑張っている。ではその人達の様子をお知らせすると、

佐々木さんは、最初の苦林古墳発掘、下川原・新しき村と三度目である。今回の発掘では、最期まで手助けして埋戻しまでをも手助けをして下さった。樽見さんは、下川原からの参加者で、今回で二度目。底抜けの明るさで我々に解け込み、胃の悪い体に鞭打って働き、昼の休みは、足を上に向けて寝て胃に血を集めるようにしていた。これは胃の悪い人に、良い方法だと我々に教えてくれた。

斎藤さんは（早稲田の人）巾色々な発掘に参加し我々とは比べものにならない。甲本<sup>大</sup>考古に對する深い知識のなさを、つくづく感じうかうかしてはいけないと反省させられた。

杉田さんは例の張り切った声ではっぱをにかけていた。又、川サの高校生の発掘参加は、若き男性の多い（イヤ、飢えたる男性）我々集団にとって、彼等らは、活性剤的役割を果した。特に中川君などは、羨望の的であった。

又、これらの多くの応援者の中に現在我々の中心になっている原田君がいた。彼は、桑原先生につれられて参加していたが我々の目には、高校生の感じが抜けない。ホウヤとして映った彼は、あまり目立たず掘っていた。彼は、これかやみつきで、後考古部員となった。桑原先生とは、城西高校の先生で、良い。貞末先生のアシスタントとして我々を大いにしごき、我々を鍛えた。一方我々の気持を理解し、まるで兄気のように相談合手になってくれた。

以上の応援者の協力と我々の努力によって多くの発掘の

成果をあげつつ発掘も終りに近づいていった。それとともに我々の疲労も目立ち発掘作業があまり進まなくなってしまう。しかし清水・長山・斉藤・室田先輩などが我々にはっぱをかけると同時に平本を示し先頭をきって山の山へ戦いを挑むのであった。そのため我々は先輩達に関心する一方我々もやらねばならないと感じさせてくれた。特に清水先輩はこの発掘で自分達の後輩を一人前の発掘者にしようと高田さんをいごき、憎まれ役を引受けると同時に彼独得のユーモアで我々の気を引き立ててくれた。例えば「人間の出すものはカシューライスやオムライスソーセージやハヤシライスバナナなどに以ているな。それも

そのはずそれを食べているからなしなどといって我々を笑わせると共に我々を気持悪くもした。長山さんは青白い顔で良く掘っていたどこからあのカがでてくるのかと思うほど非常によく掘り彼について行くのに骨がおれたものである。又、新らき村の野球チームとの試合を楽しみにしていたが家の都合で試合に出られなかった。我々にとっては、エースを失ったの我々チームの戦いぶりにはさんざんであった。長山さんはその報告を後で聞いて非常にくやがっていた。そして、皆など、来年こそは『打倒新らき村』と誓った。一方斉藤さんは去年は病気の為発掘に参加しなかったが今は白い肌を真赤に焼いて、イライライライ……といいながらエを上げていた。休憩時間に福島の話がでて斉藤さんの小学校の同級生が掘合さんの義妹であることがわかりにわか

田さん小話題に登りーしばらく談笑がたえなかった。

田さんは、放浪癖で我々のトレンヂを良く見回って、良き情報提供者的役割を果してくれた。そして、先生、清水さんとのコンビによるテレパシーで我々をまどかし佐々木さんなどにかなきり声を上げてくれた。

こうも楽しく進んできた発掘も終りに近づき、セクシヨンの標準点を求めて、清水さん堀合さん藤原君の三人でかけて、なかなか帰ってこなかった。行へ不明になったのではないかと先生が心配し、おわけて捜しに走り廻った。その頃三人は、毛呂山町の役所で地図を買い三角点を求めて道なき道を朝の十時から午後五時すなわち七時間も歩き廻ってへとへとになってしまった。

この努力も無駄に終わった。このような失敗を始めその他数多くの失敗。そして多くの経験を通じ遺物も山型押し型文や茅山式土器そして縄文早期の遺跡・室町令の時代の住居址など多くの成果をも上げた。

最後の段階として埋戻し作業が先生を含む十一人の男性と唯一の女性である佐々木さんとの十二人でおこなわれた。

この埋戻し作業は、かなり厳しい体も、疲労しきっているのでネコを運ぶ手足はふるえた。ただ精心力のみでおこなった。みんな、どろんこになり樹け声をかけてお互いに頑張った。

この埋戻し作業が終った時、先生、佐々木さんそして十人の男性部員は、ホッとした様子で満足感にみちまっていた。ついに引上げ段階になり辛かった発掘作業に数多くの

思い出をひめて別れを告げたのであった。

## 第五話 日々の記録

十月六日(金)

テストも終りホッと一安心

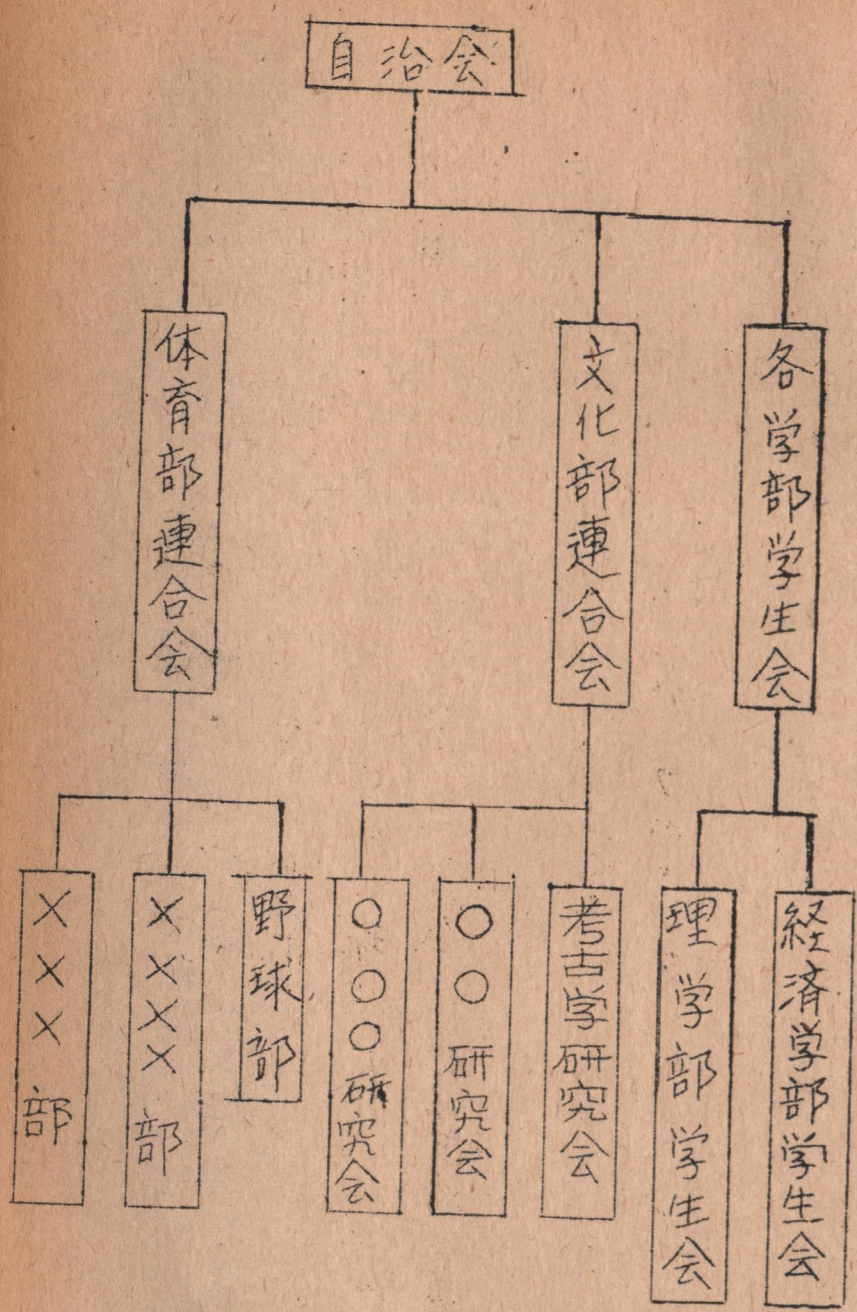
今日は夏休<sup>キ</sup>が終って始めてみんなどのように変わったかな  
あと少し<sup>遅</sup>期得しながら研究室へ直行。清水さんとそ  
して見しらぬ人が一人いただけだったふと机の上を見ると発掘の時  
の写真が出来上っていたので見ると全々見たことのないかわいら  
しい人が写っていた。この人だあれと清水さんにたずねると「こ  
の子はあの子だよ」と研究室にいたもう一人の人を指さし  
た実物と写真とをくらべてびっくり写真の印象といい  
ますとまあにやけた変な子、しかし実物は目がパツチリで  
お坊ちゃまらしい可愛らしい子なんとまあちがうことを田ん  
でしみじみ顔を見ていました。そしてこの人がおどろくなか

此原田君でありました。夏の花壇に参加し本日クラブ員  
 になったとのことでした。後輩に又一人男の子が増えて皆  
 んな大喜びでした。

十月十三日(金)

研究室に入ると二三人しかいない今日は金曜日、部会の日で  
 ある。四時三十分を過ぎててもいっこうに集まらな  
 い。その内に清水さんが来て、自治会の集会有るのでそちらに来  
 るようにとのことで全員(といっても三三人である)が聞きに行  
 った。このころ自治会成立の問題が起っていた。為にこのクラブの人員  
 もかなりかり出されていく。その為クラブ活動の方がおろそか  
 になってしまった。

本日の部会では自治会成立の説明を聞くことで終ってしま  
 った。なお自治会は次のページに示してある図の形式をとつ



ていたため、各クラブに因連はあつたのでやむを得ないが我がクラブ員  
 はクラブを放棄してまで自治会に熱中しすぎたようであつた。

○球技大会

十月二十日、二十一日

雲一つない秋晴れ、テニス、卓球、バレーボール、バスケットボール、野球の五種目で行われるクラス対抗の球技大会、我がクラブの長山先輩、バット片手に野球大会で大活躍、先生もいらっしてみんな応援……

片方では室田先輩、小柄な身体でこちらほうケット片手に卓球で大奮闘している。今日はクラブの事を忘れて汗を流してみんな一生懸命だった。

体育祭も済みホットする間もなく今度は棒祭、期日は、十月二十四日・二十五日の両日である

(この棒祭とは四十三年度の大学祭の予行練習にあたるもので、小数のクラブと同好会により成り立つ小規模なものである)

十月二十七日

今日の部会によつて棒祭の部員、役割(格合・復元・製回)とどんな様式で行なうかが等について取り決められた。

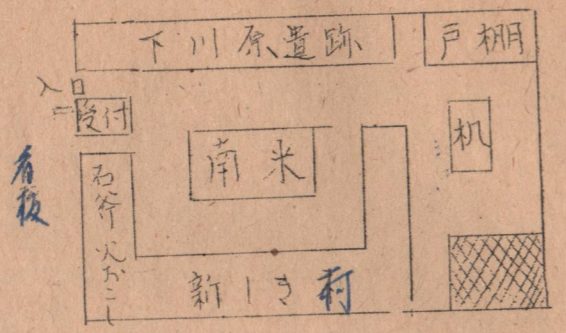
始末の大学祭とあって先輩達を始め各部員達も非常にハッスルして、それからの毎日、活気に満ちた研究室内であつた

「ウーっついたー」 「セメゲン」 「ヒメダイン」 「石膏膏」 「水……」 「……」などという喚声が研究室内に響きわたった。

○棒祭前日

今日二十三日は秋分の日、しかも明日の棒祭準備のため「全員十時まで集合」との御触れで全員集合した。大変立派である。まづは七〇四号室の大清掃に始まり次に配置へと移った。

この配置には、非常に苦勞した。なにしろ狭い研究室、一室での展示、そのために研究室内に置いてある器材やほうき、食器類、きたなしいトレパン、軍手、麦藁帽、等のものを、いかにして隠すか？、<sup>ラ</sup>「うーん」と首を傾げてしまう。現在の研究室ならば、それ又に出すという手があるのだが、この七〇四号室には、うううもな、仕方無くこれらの物を、机の下に押し込み、上から暗幕でスッポリ覆うことにした。最後に遺物の展示にとりかかった。ドアを入り、左側に下川原遺跡、右側に後村の机、の並び、石斧、火おこし、入口を入って一番右に新しき村、遺物、室内の中尖には、先生が南米にいらして発掘なさった遺物を展示した。また壁には、それそれの実際図が張りめぐらされた。



又入口には、米谷さんおアイデューによる木の皮を使用した看板がかけられた。このクラブ員の中には美的感覚のすぐれた者が多い、今回も特に清水先輩の活躍が目立った。これで一応終了。とホッとしてたら、ある人が「他のクラブや同好会は一階、二階ですよ。ここは即ち考古学研究会、ただ一つ三階で、

見のがされたいです。か。……とうとうことでポスターがあらうこちらに貼られた。最後に、遺物についての知識を、詰め込んだ。

### 第六話 榊祭

学内の先生方を始めと、数多くの城西生、そして所の方方が入れ替わり立ち替わり見にこられた。昨日遺物について詰め込んでおいた知識もイザとなると、「オイあれ何んていつてたっけ」「説明してやってくれよ」「困っちゃった」と部員同志助けを求めあつて冷汗をかきながら奮闘ぶり。一方、夏の合宿を懐かしくあつて「これ俺達のほつていた所で見つけたんだ……とかこれ一度は、ポー」と拾て遺物だと言われてあわてて拾った。とか楽しいそうなの、会話が聞えた。又クラブの評判については、「出品も素

晴しいが、お茶やお菓子を出してくれるので更にいい。」という声がチラホラ流れた。

やがて榊祭の最後の日を迎へ、昼も過ぎ四時になった時、「今日のためにコンパを聞こう。」

「会費は百円で足りない分は、部費で補うことにしよう。」  
「賛成、賛成……」

あるものは売店へ行きへ少ない予算内で量があり、しかもおいしく食べられるそんなものを求めて……残っている数人によって机が整頓され、十四名の部員達が、それを囲んだ。皆んなが、席についたので誰ともなしに「乾杯、乾杯……」の音が、かけられ今日の成功を祝した。二日間の緊張が解かれ、この上もなく幸々せ々な顔・顔・顔……残念なことに、そこには主将の顔は見えなかった。へ文化連合会に、行っていたのだ。壁よりにミッチーと空田先輩が仲良く腰かけていたので、ある部員が「結婚式みたいだね」

と言ってからかった。もしたら室田さんは嬉しそうに笑っていた。  
ミッチーはほんのりと頬をそめてうつむいた。

会が進行し、終わりに近づいてもまだ主将があらわれたい。

○中川さん爆発する。

榊祭のこなわれれている間は主将として研究室に滞まって  
榊祭の成果をじっと見守っていたかだったのであるが、文化  
連合会から考古学会より、手伝を出してほしいとの要望に、  
誰一人として行きたがる者はいなかった。そこで主将自から  
が出投したのだ。部員達のあまりにもまとまりのなさと、自  
己本位を痛列に感じたのだろう。ここであついに「爆発」して  
しまった。

### 第七話 日々の記録

十二月に入ってからには緊急部会が絶えず開かれた。もちろん内容は  
主将問題である。結果はいつも同じところまで行くと、堂堂巡り  
を繰り返す。

三年生は三年生で中川さんを説得させようと、おおいに努  
力をしていた。しかし中川さんの決心も非常に堅く中々、  
折れない。又学内では、あちらこちらから考古学会へ  
の批判が絶え間なかった。

十二月八日

今日も主将問題の話し合いを続けた。

ある人の意見で「いくら部員のみで話し合っても仕方ないし、  
こうなったら先生の御意見を聞き、お聞きしようではないか」という  
ことになり、先生参加のもとでの部会が開られた。  
まづ先生が中川さんの意向について語られた。

「中川君は、このまじりのないクラブのままでは考古学研究会も、いづれは解散してしまふ。もしここで自分が辞めることによつて部員達がそれぞれ考えしてくれるならば喜んで辞めたいと言つてゐる」と言われた。その日の部会での結論として「私達だけで、いくら話し合つても、それは主将というものについての批判と各部員の反省のみでまったく一方通行である」。そこで先生に、是非、中川君を交えての部会を開きたいのだが部員が言ったのは、中々応じてくれないことを申し出、先生による説得のおかげで我々は中川さんを交えた部会を開くことができた。

十二月十五日

今日の部会で話し会つたことは名目上の主将についてである。このことは、我々クラブの基本方針の改革である。すなわち昨年にも問題になった。自由放任主義と統制主義との闘いである。

昨年は自由放任主義の勝利となり、今ままで続いてきたが、昨年は自由放任主義の勝利となり、今ままでつづいてきたが、昨年の私達と同様に今年の一年生も自由放任主義というものが理解できない。そのために主将問題においてそれが大きく現れたのである。

A「主将はやはり主将としての権力を行使すべきだ。」

B「主将とは名目上であつて全て自己の責任のもとでクラブを、運営して行く。」

……というAとBとの意見の対立である。今までは、Bの考えのもとで、クラブは運営されたのであるが、日々かたつにつれて、一年生がそれを許さなくなり、主将に主将としての権利を求め始めた。主将も除々に権力を発揮し、少づつ統制し始めたのである。それに主将が二年生とあつて後輩は二年生に従うべきかあるいは、

三年生に従うべきかとおおいに迷った。その結果、専門的に、先輩を親う着が多くなり主将を無視する傾向が生れてきた。そのためクラブの統制が全くバラバラになってしまったのである。「私達はクラブをやっていてもしんど専門的に詳しい先輩か、それをこうしろ、こうやれ」と言われれば主将よりも先輩に従ってしまします。」

「先輩と主将との意見が全く違ふ場合など、どちらも立てなくてはいけないうとして、やりづらい」等の意見が次々と出た。「いくら自由放任主義だからといってもある一部の者がクラブに顔を出さなければ、やっているほうがバカらしくなりなすよ」と、この時とばかり各部員は自分の思っていることを全て吐きだし、今までの溝を埋めようと努力した。その徹底的な話し合いの結果、先生の助言もあってやはり主将は主将としての権力を

持ち多少の統制力を認められた（後輩が除々に多くなるにつれ、しめこまかつかないから）又先輩（3年）がいるのに二年が主将になること、自体がおかしいとの結論が出た。さう早くその場で主将交替の選挙がお行なわれた結果、清水先輩が選ばれ、ここで新しい方針のもとでクラブが運営され、今日に致った。中川さんもクラブに復帰することになり長い間、尾を引いた主将問題もここで終止符を打つことができた。

やがて十二月二十一日の冬休みに入った。冬休みという期間もあつたせいかクラブ内は、わだかまりもなく研究室には、明るい笑い声で満ちた。暇な者は絶えず研究室で接合し、これでいくつ着いた着いた、これで一休み、お茶でも入れようか、ついでに部費でお茶菓子買って、こようよ、といった毎日か過ぎ試験シーズンがやってきた。研究室では勉強するものが

増えてきました。

### 第八話 第三回発掘展示会

二月二十四日(土) 第三回発掘展示会を、経済学部三階の七〇四号で、考古学研究室で開催した。  
後期試験が終ったあとだったために、一般学生の来場が少  
なく新しき、村関係者だけだった。

### あとがき

二年前のことを思い出しながら書き  
綴った為、だいぶ忘れたところも多く  
読みづらいたところもあるとはおもいま  
すが私達第二期生が一生懸命書きあげ  
たものです。これに引きつづいて第三期  
第四期生……に受け継いでいってもら  
いたい。

尚、本書の印刷に当って多数御協力く  
ださりました事を深く感謝致してま  
ります。

昭和四十四年十二月二十日 第二期生

城西考古の歩み(第2部 草創期)

昭和45年 3月1日 発行

著者 第2期生

発行者 第2期生

印刷者 第2期生

---

発行所 城西大学考古学研究室  
埼玉県入間郡坂戸町榎丘1076  
〒350-02 TEL 0492 (81)2233~5

---

